

青切符

泉鏡花作

全一章

「おゝ、酷いこと。」

紫の荒い矢絣の羽織を、絞られたやうに身を捻ぢて、よろ／＼と二等の戸を入つた娘がある。

「ずつと其方へ、ずつと、」と其の後から聲をかけながら、潛り込んだのは、兄か、許嫁か、いゝ中か。それとも供の者か、五ツばかり年紀上の、二十二三と見えたる青年、鼠の中折の鍔廣なのを、躑躅時の快晴に、却つて、一雨浴びたやう、線の柔な三角形に押頂き、黒絢の紋着を、丈長く着て、袴を穿いた、脊が目立つて高い。

青年が、縦に二側にぎつしりの乗客の中に挟まれて立つた時、戸はハタと鎖されて、娘は對の窓へ、トンと肩をあてゝ、象牙の柄の極めて長い、蝙蝠傘をついて、

「大變な乗客。」と言つた。

然うすると青年が、伸上つて室内を見廻して、娘

に向いて、

「未だ／＼可い方。あゝ、」

頭を深く、胸につけるまで頷いたが、此の仕切を
選定したのは、我が過失でないのを諭して、保護の
任を空しうせざる由を告げたのらしい。

娘は満足、

「然うね、」と軽く、胸を張つて、腰を捻ると、
其の窓から横顔を出して車外を覗いた。

ふつさりした輪の大きい銀杏がへしを、煽るが如
く、衝と手を開いたのは驛長で。

汽車は品川へ向けて、此の時新宿を發したのであ
る。

「出ます。」

「あゝ、出るわ。」

と娘は緋天鵝絨の緒のすがつた、高いぼツくりを
二ツばかり床板にコト／＼と鳴したが、立直つて、

「品川に着くのは何時でせうね。」

「直ですなあ。」

「一寸、それでも私時間が惜くつてよ。高輪の叔
母さんの許へも寄らなきやならないし、品川にも行

かなきやならないし、」

言ひかけて傾いて、眞面目に、眞面目に青年の顔を、

「あの」

「はあ？」と尻上り。聞き取れなかつたと思つたさうで、前にかゞんで、耳を差出すやうにした。言ふまでもないが、此の室内に饒舌つて居るのは二人ばかりでは無かつた。

「私、困るわ。」

「はあ。」

「麻布の伯父さんの許へ寄らなくツちや悪かつたわ。」

「可いでせう、構はんでせう。」

「構はなか無いの、あとで怨まれるわ。だつて、たまの日曜なんだもの、さう／＼は廻り切れなくツてよ。私、困つちまふ、」と殆ど獨言のやうに言つたが、フト黙つて、口を、心ほど開けたまゝ、目をぱつちり。さて、何を見るときもなしに、青年の帽子の鍔の縁から、直角に天井の片隅を見据ゑた。乗

合は、殊に此の小な室に、無慮五十人以上あつたけれども、時に娘の眼中にあるものは無かつたらう。左右の頬の内勤くばかり、大きな前歯と唇を上下に、何か口ずさむ風采、かさねて乗せた蝙蝠傘の柄の上で、小指を一寸々々と弾いたのは譜を算へたものゝやう。

此の舉動の一秒時前、娘が途中で言を消したので、青年は一向要領を得ず。

「ですよ はあ。」とばかりで、かゞんだ身を伸してすつくと立つて、屹と腕組をしたが、それでも気がすまぬと見えて、青い切符の端を噛んだ、勿論娘の分と二枚也。ト流るゝやうな、森、畑、畦道の馬だの、雄大な煙突だの、草だの董だのが、ばつたり、遠目金を外したやうに、赤土の土手にかくれたので、娘は、自然に遠ざかつたやうな顔をしないで、詩敵ある——此の女に取つて、——態度を俗了して、また、

「困るわ、何うしませう。」

「一寸、何うしませう、皆で来い／＼ツて言ふの

だもの、困こまツちまふことよ。私わたし一寸、何時なんじに着つくでせう。」

「ざツと小こ一時間じかんですかな。」

「のろいのね。」とたしなめるやう、細ほそい銀鎖ぎんぐりの附ついた、銀ぎんの小形こがたの女時計をんなどけいを出だして、パチンと開あけ、一ひとツまはして、うつむいて、じつと見みた。頬ほの肉しはこれにも動うごいた。而そして後うしろざまに、肱ひぢを窓まどに掛かけて、瑕茶えびぢやの袴はかまを長ながく蹈伸ふみのばしたばツくりのを、室しつ内に按排あんばいしたる、彼かの吸殻すひがらおとしの器うつはに乗のらせて、胸むねをぐツと反かえしたが、恚かる姿勢しせいの少女せうぢよは近頃繪畫界ちかごろくわいぐわかいにも流行りうかうするので。

一ひと目見めると、青年せいねんもいそがはしく、帶おびの間あひだから時計とけを出だして齊ひとしく視ながめた、些細ささいなことにも二人ふたりの意い氣きは相投あひとうずる。

「二時じねえ。」

「え、五分ぶんばかり進すすんで居あます。」

「眞個ほんたうに私わたし、時間じかんが惜をしくツてならないこと

よ。

「同感どうかんですなあ。」

「ねえ、一寸、」

「はあ、」

「おゝ、暑い。」と娘は急に顔を背向けて、頬へさす眞赤なの手で遮つたが蔽ひ果さず、向直つて、猶まともに照すので、項をおさへて、うつむけになると、埃が白く見ゆるまで黒髪に一日があたる。これにも堪へないかして、思はず振あをむくと、光線が又齒へ染み込むばかりだから、顔をふつて、首をふつて、

「おゝ、暑い。堪らないこと。」としたゝかに眉を顰めた。

青年はあたふたして、二三度及腰に、切符を銜へて、手を出したけれども、身動もならない充満の乗客に、手は窓の戸に届きはせぬ。

「お閉めなさい、／＼。」

「だツて堅くツてよ、堅くツてよ。」と身震ひをしながら、兩袖に觸るばかりの、左右の客を見まはしたけれども、席を譲つて立つものはなかつた。娘の容子は、はじめから、聊かも可憐でなかつたら。

あはれ、うまれつきではない。
渠かれは此この頃ころの試験しけん
に、一番ばんで及第きふだいした所せ為ゐである。

【完】